

論説・評論教材の発掘とその指導

高校一年生の場合

佐藤 秀之

はじめに

生徒にとって教科書というのは何であろうか。生徒にそのイメージを一言で言わせてみると、「硬い」という言葉が即座に返ってくる。また別の生徒は、「ありきたりのもの」とも言った。初めて読む文章であるのに、「どこもなく新鮮味に欠けるような気分がする」というのである。日頃読み慣れている漫画や雑誌などの軽い読み物以外は、なかなか受け入れられない生徒がふえてきているのかもしれない。

中でも読みの領域で、生徒だけでなく教師にまでもあまり人気のないのが、論説・評論教材である。教科書の評論教材は「要旨を読み取るのに時間がかかり、おもしろみがない」という生徒の声をよく耳にする。なぜであろうか。本当に教科書の評論はおもしろくないのであろうか。たしかに、評論教材の要旨の把握や、文章の要約作業に興味を持たない生徒が多いのも事実である。

しかし一方で、それらの活動は評論における読みの力を養う上で、どうしても必要かつ大切な活動である。さらに、生徒にとっては「与えられたもの」教科書の中で、たまたま生徒の目を開かせるような、新しい発想やものの見方との出会いがあることもある。

そこで、私は以上のようなことをふまえて、「学習者の意欲を喚起する評論教材」の発掘を模索してみた。

教材発掘の視点

まず最初に私はこの度、教科書にとりあげられている評論教材をすべて抜き出してみた。予想されたことではあるが、非常に多くの種類の作品が教科書に採択されていた。十八種類の教科書の中で、六十編の作品があり、同じ教材は一つだけであった。大まかに分類してみると、やはり文化論が一番多く十九編、以下言語・芸術論八編、人間・人生について六編、科学・機械六編と続く。筆者で言えば、

森本哲郎・加藤秀俊（三編）、小林秀雄・別役実（二編）の四人だけが複数掲載で、以下五十人もの筆者が並んでいる。これは文学作品の場合と大きく違う点であろう。

「どこことなく新鮮味に欠ける気分がする」という生徒の声も、それは「気分」だけで、その一つ一つの教材は、各教科書会社がいりいな角度から教材を発掘してきて、精選されたものであるはずである。

さてこうしてみると論説・評論教材の発掘は、他の分野の教材発掘よりも気分的に柔なような気がするのである。問題は、その教材が当該年令の学習者に適しているかどうかである。内容、構成、レトリックについていけるかどうか。問題意識を確かめられるか。学習者の興味・関心をそそる教材か、といったような所に視点を当てながら発掘していくことが大切である。

以上から、私は教材発掘の視点を次のように三点にしばった。

- 1 学習者の欲求に基づいたもの（生徒の読みたいテーマにそったもの）
- 2 問題意識を確かめられるもの
- 3 当該学年にふさわしいもの（内容・形式・レトリック）

教材の発掘と選定

今年度は一年生の現代文を担当している。使用教科書

は「高等学校国語Ⅰ 改訂版」（学校図書）、評論教材は単元四評論(一)と単元十二評論(二)に、計四編載っている。一学期実践教材は以下のとおりである。

四月 単元一随想(一)

どうすれば虹の根元に行けるか 黒井千次

四〇五月 単元二小説(一)

アゲハチョウ 椎名 誠

五〇六月 単元二小説(一)

物と心 小川国夫

六月 単元四評論(一)

心の闇の森 椋 鳩十

六〇七月 評論投げ入れ教材

アンケート実施

今回投げ入れ教材の選定に当たっては、前記「教材発掘の視点」にそって探すこととした。そのために、1の観点から、生徒はどんなものを読みたいかを調べるアンケート調査を実施することによって、少しでも学習者が身近に感じるよう配慮した。アンケート実施は、六月に評論(一)に入る前に行なった。アンケート用紙は、次のとおりである。（B5プリント・横書き・一年二組五組八組の三クラスで行なった）

「評論」を読む

随想と評論

「随想」とはあれこれと思うままの感想。またそれを興にまかせて書きとめた文章。「評論」とは専門の分野や社会の動向などについて、一般読者を啓発するために、自分の意見を加えながら解説した文章。(いずれも新明解国語辞典による)

今日から評論にはいります。評論は、さまざまな問題に對しての筆者の切り込みがあり、筆者自身の意見(論)が普遍化されたものです。

読者であるみなさんは、1 筆者の主張(論)を読み取る。2 筆者の主張の問題点を指摘する。3 その問題に對する自分の意見(論)をまとめる、という過程が評論を読む場合の道筋です。

1 そこで、みなさんはどんな問題について書かれた「評論」が読みたいのでしょうか。次の中から一つだけ選んで○印をつけてみてください。

ア 社会問題 イ 文化論 ウ 言語 エ 芸術

オ 学問 カ 思想 キ 人生論

2 題名だけ見て、読みたいものはどれでしょうか。一つ以上選んで、○印をつけてください。

1 「学び」の構造 2 学ぶ人、学ばぬ人 3 渚の民俗学 4 言語と道具 5 美の終末 6 一握の大理石の砂 7 目と手と心 8 交友について 9 嫉妬につ

いて 10 生きること考えること 11 現代の中の未来

12 生活の欧化と文化生活 13 情報量と体臭量 14 情報

報の洪水に流されるな 15 東京の中の「田舎」 16 日

本式結婚 17 「甘え」の構造 18 言語は色眼鏡である

19 音楽デザインの可能性 20 地球は丸かった 21

真実の百面相 22 雑器の美 23 やさしさの時代に

24 アメリカ素描 25 プロメテウスの犯罪 26 赤いエン

ピツ 27 水の東西 28 「無心」ということ 29 機械

と人間 30 思いつめる 31 金銭と精神 32 日本人の

空間感覚 33 好きな言葉 34 木に学ぶ 35 自動販売

機 36 文学を生む心 37 現代の人間関係 38 闇との

向かい合い 39 人生について 40 人生と文学 41 若

さと理想 42 憲法を読む 43 自然の声と文明 44 日

本人の契約観とルール 45 ことばの力 46 座わること

47 日本文化の雑種性 48 コインは円形である 49

美を求める心 50 自己基準と他者基準 51 転石苔を生

ぜず 52 近い旅遠い旅 53 「手首」の問題 54 私に

とって都市も自然だ 55 雑木林の思想 56 言葉選びの

周辺 57 日本的思考の原型 58 自然界の表情 59 現

代日本の開化 60 ほほえみの話 61 日本的の思考原型

62 自然界の表情 63 座敷の喪失

アンケート結果

1 について

組	社会文化問題論	言語論	芸術学問思想論	人生論	日本論	計
二	五	一	五	九	二	四三
五	七	二	四	一〇	一三	四三
八	五	二	四	九	一三	四一
計	一七	一四	一三	二八	四四	一二七

以上の結果からわかるように人生論が三五%、思想二二%、社会問題一三%と上位を占めている。これは、高一という思春期をむかえた生徒たちが、自分の「生」について真剣に考えはじめていることを示しているように思う。また「思想」と「社会問題」を合わせると三五%になる。これは、「ネクラ」を嫌う現代高校生といわれるが、実はそうでもないのかもしれない。つまり、「不安定」だからこそ、何かしつかりしたものにあこがれているのではないか、ということが言える結果であった。

2 について

※ クラスごとの上位作品

二組

嫉妬について 一五 プロメテウスの犯罪 一三

真実の百面相 一三 自動販売機 一二 東京の中の

「田舎」 一一 交友について 一〇 ほほえみの話 一〇

五組

東京の中の「田舎」 一五 プロメテウスの犯罪 一四 自動販売機 一四 ほほえみの話 一三 嫉妬について 一一 地球は丸かった 一一 やさしさの時代に 一〇

東京の中の「田舎」 一二 自動販売機 一二 握の大理石の砂 一一 プロメテウスの犯罪 一〇 好きなことば 一〇

※ 三クラス合計した上位十編

- 1 東京の中の「田舎」 三八人
- 2 自動販売機 三八人
- 3 プロメテウスの犯罪 三七人
- 4 嫉妬について 三四人
- 5 ほほえみの話 三二人
- 6 真実の百面相 二七人
- 7 好きな言葉 二五人
- 8 一握の大理石の砂 二二人
- 9 人生について 二〇人
- 9 地球は丸かった 二〇人

教材の選定

アンケートの結果をふまえ、今回は1の「人生論」をテーマとした。2については、題名読みの実践が考えられるが、読みの学習の一つの実践の可能性として次の機会に試みてみたいと思っている。

◎ 展開の目標を次のように設定した。

- 1 文章を構造的にとらえ、大筋をつかむ。
- 2 筆者の考え（論・意見）と具体的事例（事実）を照応させる。

3 小論文（作文）を書く。

◎ 教材は以前から蓄えていた作品の中から選定した。

- A 森本哲郎 「生き方の研究」（新潮選書 一九八七・九）より 「序 生き方の探求について」
- B 中野孝次 「今を深く生きるために」（海堂社 一九九〇・九）より 「一瞬一瞬を味わう人生こそ」指導のポイントと展開のあらまし

1 「人生」についてどういう切り込み方をしている

か、二文を重ねて読みそのちがいを明らかにする。

A 「生き方の探求について」

- ・市毛勝雄氏（埼玉大学）の「構造的な書き方
- 「起・承・束・結」にてらして構成をとらえる。
- ・対比されていることがらに気付かせる。具体例はいくつ出てくるか。出てきた具体例を分類せ

よ。

現代の日本人とひと昔前の日本人との「生き方の探求」のちがい

□

・筆者の主張→「人生は『方便』ではない。」「根源的に問いつめていくべきもの、問いつめていくに値するもの」

B 「一瞬一瞬を味わう人生こそ」

・具体例（体験）から社会批評・文明批評へ

□

・人生について述べていること→「目的達成に意義があるのではなくて」「過程の一瞬一瞬こそすべて」

2 「私の人生論」と題して、小論文（作文）を書く。

授業を終えて

結論から言えば、「展開の目標」1と2は達成できたけれども、「指導のポイント」1は達成できなかったということである。すなわち同じテーマを題材とした二つの教材を重ね合わせて筆者の論のすすめ方の違いを読み取る、あるいは、論の切り込み方の違いを読み取るという展開ができなかったのである。これは、私が人生について述べた文章であれば良いという意識だけで教材を選定したために、

二教材を重ね合わせることで自体に無理が生じたのであった。「人生論」とテーマが決まってから、選定までの時間にあまり余裕が無かったこともあるが、何よりも、教材を探すことにだけ目が向いて、目標や展開の方法まで考えながらの、きめ細かな選定を怠ったことが最大の理由である。

それ故に、展開の目標3の小論文も、教材から離れざるを得ず、生徒自らの「人生論」についての文章を書かせざるを得なかった。ただ、それらの文章を読んでもみると、高校一年生の彼らが、彼らなりに自らの今の「生」について真面目に考えているということを最後に記しておきたい。以上、今回は本当に不十分な取り組みに終ってしまったけれども、次への課題を残しながら、私の拙い報告を終りとする。

(広島市立舟入高等学校教諭)